様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月　７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３３３９

研究課題名（和文）近世西欧神秘主義の信仰論をめぐる系譜学的・宗教哲学的研究

研究課題名（英文）Genealogical and religio-philosophical research on the faith of Western European mysticism in early modern times

研究代表者
渡辺　優（WATANABE, Yu）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：４０７３６８５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：神秘主義について従来の研究や一般的理解では概して「（神秘）体験」に重心が置かれてきた。本研究ではしかし、とくに16世紀スペイン、17世紀フランスに開花した近世西欧「神秘主義」を主題として「信仰」論の重要性を明らかにした。さらには、信仰論を軸に、中世から近世、近代そして現代にかけての神秘主義（をめぐる思想と実践）の変容に一定の見通しを与えた。これにより、神秘主義をより広い思想史・哲学史の文脈に位置付けるとともに、西洋近代における宗教理解を問い直す新たな視点を提起した。
主として十字架のヨハネ、スュラン、ギュイヨン夫人、セルトーらを扱い、複数の学術論文のみならず、一般向け書籍でも成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「神秘主義」は、19世紀以来の宗教学の歴史において最も重要な主題のひとつであり、「宗教とは何か」という問いに答えるための特別な研究領域とみなされてきた。だからこそ、従来の神秘主義理解を問いなおすことは、私たちの宗教理解をより深く豊かにする契機となりうる。本研究は、これまでの「体験」中心主義的な神秘主義理解に対して、神という他者を希う「信仰」に神秘主義の核心を認め、その信仰論が歴史のなかでどう展開してきたか、従来見落とされてきた思想史の一側面に光を当てた。
その結果得られた成果は、非合理的・非理性的なものとみなされがちな神秘主義を、把握し難い他者を希求する「別様の知」として捉えなおすことを促す。

研究成果の概要（英文）：Conventional studies and popular understandings of mysticism have generally placed emphasis on "(mystical) experience. In this study, however, I have clarified the importance of the theory of "faith" as the subject of early modern Western European "mysticism," which flourished especially in 16th century Spain and 17th century France. Furthermore, with the theory of faith as its axis, I have given a certain perspective on the transformation of mysticism (thought and practice surrounding it) from the Middle Ages to the contemporary period. By doing so, I placed mysticism in the context of a broader history of thought and philosophy, and showed a new perspective that reexamine the understanding of religion in the modern West.
I have published several academic papers as well as books for the general public, dealing mainly with John of the Cross, Surin, Madame Guyon, and Certeau.

研究分野：宗教学

キーワード：神秘主義　フランス神秘主義　スペイン神秘主義　魂の根底　暗夜　信仰　十字架のヨハネ　ジャン=ジョゼフ・スュラン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

神秘主義は、19 世紀の宗教学草創期以来、「宗教とは何か」という本質への問いにとって重要な主題として論じられてきた。そこでの神秘主義理解は、概して「（神秘）体験」を軸としていた。この傾向は、ウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』（1902 年）によって決定的なものとなって以降、今日まで神秘主義理解の基調となってきた。

20 世紀後半になると、神秘主義概念は多種多様な宗教現象・超自然的現象にも拡散し、その輪郭は不明瞭なものとなる。日常的な用法としてはむしろ軽蔑的な意味合いを強くし、それまでもっていた魅力を失い、宗教研究における関心も低下したといえる。

しかし、1980 年代以降、人文社会学全般における言語論的転回の影響も受け、神秘主義研究にも新たな展開がみられた。とりわけ、「神秘主義（la mystique)」をまずは近世西欧に出現した歴史的形象として捉えようとしたミシェル・ド・セルトー（1925-1986 年）の一連の研究が画期をなした。今世紀になると、セルトーが提起したさまざまな論点を深化発展させる動きが活発化し、近世神秘主義の重要文献の校訂作業が進展したこともあって、神秘主義研究の可能性はさらなる拡がりをみせている。

以上の研究動向を背景として、本研究は近世神秘主義の「信仰論」に照準を定めた。従来の体験中心主義的神秘主義理解の根底にある「現前」へのコミットメントを相対化し、むしろ「不在」の他者の「希求」としての信仰という営為を前景化することによって、新たな神秘主義理解を提起し、従来の神秘主義概念の批判と拡充を図ることができるという見通しを立てた。

２．研究の目的

本研究の目的は、大きく分けて次の二つである。第一に、近世西欧神秘主義の「信仰」論に光を当て、狭義の神秘主義の歴史にとどまらず、より広い思想史的文脈に布置することによって、その歴史的意義を浮き彫りにすること。第二に、近世神秘主義の信仰論と、現代宗教哲学における「信」論とを照らし合わせ、「宗教」なるものの輪郭が揺らぐ現代におけるラディカルな「宗教」思想としての神秘主義（論）の可能性を探ることである。

より具体的な研究目的は、以下の三点にまとめられる。

(1) 北方を中心に興隆した中世神秘思想と近世フランス神秘主義との連続性および断絶を、「存在論から心理学へ」という包括的な観点から見通すこと。

(2) 十字架のヨハネの思想、とくに「暗夜の信仰」をめぐって、17 世紀フランス神秘主義および 18 世紀以降の思想史における解釈の諸相を検討し、解釈の変遷に一定のベクトルを見出すこと。

(3) 近世神秘主義の信仰論と、現代宗教哲学における「信」の問題の接点を探り、近世神秘主義がポスト近代の宗教思想研究の新たな糸口となりうることを示すこと。

３．研究の方法

本研究は文献解釈を基本的方法論とするものである。本研究遂行者がこれまで取り組んできた 17 世紀フランスの神秘家ジャン=ジョゼフ・スュラン（1600-1665 年）の信仰論を出発点として、17 世紀に興隆したフランス神秘主義を中心に、その前後（中世末期・近代）の歴史に研究の視野を広げるという戦略をとった。

(1) ミシェル・ド・セルトー、ミノ・ベルガモ、ドミニク・サランらの先行研究を再検討し、論点を明確化するとともに、集中的に検討すべき重要文献を抽出した。中世北方の神秘思想については、タウラー、ブロシウス、『福音の真珠』など、17 世紀フランスにも翻訳されて流通した中世北方神秘思想の文献群（ラテン語訳、フランス語訳文献）を収集、検討した。17 世紀フランス神秘主義については、フランソワ・ド・サル、フェヌロンら主要な思想家に加えて、ジャン=ピエール・カミュ、ピエール・ド・ポワティエ、オノレ・ド・サント=マリらのテクストも広く考察対象とした。

(2) スュランの信仰論に深甚な影響を与えた 16 世紀スペインの神秘家十字架のヨハネ（1542-1591 年）の「暗夜の信仰」論について、スペイン語テクストに即して整理した。そのうえで、17 世紀における十字架のヨハネの受容について、先行研究も手掛かりに、関連文献を精査した。

(3) 近世から近代にかけての神秘主義の運命を決定的に左右した 17 世紀末のキエティスム論争に注目し、そこでの十字架のヨハネ解釈のあり方（とりわけギュイヨン夫人のそれ）を探ることで、18 世紀以降の神秘主義的信仰論の展開を見通すことを試みた。

(4) 近代以降の神秘主義的信仰論の展開については、以下の思想家・資料を取り上げた。18 世紀については、ジャン=ピエール・コサード（1675-1751 年）、『神の摂理への自己放棄』（18 世紀前半）。19 世紀から 20 世紀にかけては、ジョン・チャップマン（1865-1933 年）、ジョルジュ・ルオー（1871-1958 年）、リジウのテレーズ（1873-1897 年）、ジャン・バリュジ（1881-1953 年）、ジョルジュ・バタイユ（1897-1962 年）、サン=テグジュペリ（1900-1944 年）、シモーヌ・ヴェイユ（1909-1943 年）、ミシェル・ド・セルトー（1925-1986 年）。

なお、研究の基本となる文献収集については、研究開始初年度にフランスに渡り、現地調査を実施した。二年次以降も、現地での文献収集や研究者との交流、発表を予定していたが、Covid-19 の感染拡大のため、中止を余儀なくされた。現地の研究者とは折に触れてメールで連絡を取り、助言を受けた。資料の収集については、国内にいながらも、Gallica や Google Books など各種デジタル・ライブラリーを最大限に活用した。

４．研究成果

○主な発表論文とその内容（書籍掲載分を含む）

（1）近世フランス神秘主義の歴史的付置（中世との連続性と断絶）をめぐって

・**「魂の根底の溶解？――中世北方神秘思想と近世フランス神秘主義のあいだ（一）」『東京大学宗教学年報』第 36 号、2019 年 3 月、17-32 頁。**

・**「魂の根底の溶解？――中世北方神秘思想と近世フランス神秘主義のあいだ（二）」『東京大学宗教学年報』第 37 号、2020 年 3 月、1-17 頁。**

中世北方神秘思想のテクスト群が、いかに 17 世紀フランスに流通し、神秘主義（la mystique）の興隆を準備したかを確かめた上で、前者の根本モチーフのひとつ「魂の根底」論が、17 世紀フランス神秘主義の言説空間の中で決定的に変質したことを明らかにした。

（2）神秘主義的信仰論（十字架のヨハネの「暗夜の信仰」論）の解釈史をめぐって

・**「暗夜の信仰の近世――一七世紀フランス神秘主義における十字架のヨハネ解釈の諸相」『宗教研究』第 397 号、2020 年 6 月、49-73 頁。**

一切の感覚的体験への拘泥を戒め、闇の中で神を信じ愛すべきことを説くヨハネの「暗夜」の教えが、17 世紀フランスでさまざまに解釈されるなか、その両義性・動態性を失っていったことを明らかにする一方、スュランにおいて創造的に変奏されたことを示した。

（3）神秘主義的信仰論と現代宗教思想の接点の探究、および神秘主義概念の刷新と拡充をめぐって

・**「「パロール」とそのゆくえ――ミシェル・ド・セルトーの宗教言語論の輪郭」『天理大学学報』第 70 巻 1 号、2018 年 10 月、1-28 頁。**

神学から精神分析、文化研究まで、人文社会諸科学の複数の領域を横断するセルトーの思考の全貌を、それ自体が現代に神の言葉（パロール）を希求する言語活動であるという理解の下に概観し、統一的に把握することを試みた。

・**「神秘主義の知のありか」『文化交流研究』第 33 号、2020 年 3 月、43-63 頁。**

神秘主義をひとつの「知」として捉えた場合、その現代的な可能性をどのように語ることができるかを問い、スュランや十字架のヨハネのテクスト解釈を通じて、光と闇、永遠と時間、沈黙と言葉など、二つの対立物のはざまで揺れ続ける動態性を取り出してみせた。

・**「西洋近世の神秘主義」『世界哲学史』第 5 巻、ちくま新書、2020 年 5 月、45-74 頁。**

神秘主義を「愛知」の営みとして解釈することで哲学との接点を探るという観点から、アビラのテレサと十字架のヨハネの思想を紹介し、両者における「経験」と「言語」の重層性と、その根底にある神への愛の動態を論じた。

・**「日常的実践という大海の浜辺を歩く者――ミシェル・ド・セルトーと「場」の思考」『日常的実践のポイエティーク』解説、ちくま学芸文庫、2021 年、516-547 頁。**

日常的実践という「歴史の他者」へと向かい、別様の歴史記述を求めるセルトーの思考が、イグナチオ・デ・ロヨラの「場の構成」に由来する宗教的技法と不可分であること。また、それが最終的には「信じる」という主題に向かっていくことを明らかにした。

・**「キリスト教の破砕／燦めき――現代カトリックの危機とミシェル・ド・セルトー」（『世俗の時代のスピリチュアリティ』東京大学出版会、掲載予定。）**

セルトーの思考が、68 年 5 月の出来事を転機として、狭義の神学から人文社会諸科学へと展開していったこと、しかしそれはキリスト教神学からの離脱ではなく、現代キリスト教の危機に応答してなされた新たな神学の探究の試みであったことを明らかにした。

全体的にみて、近世神秘主義の信仰論の思想史的意義を明らかにするという本研究の第一の目的については、満足すべき研究成果を挙げることができた。このことの意義は、とりわけ、本邦では中世の神秘思想（ドイツ神秘主義）に比べて研究の蓄積が少ない近世神秘主義の特徴を、中世と近世を橋渡しする思想史的観点から立体的に浮き彫りにしたという点で大きいといえる。また、16 世紀スペインの神秘家十字架のヨハネの信仰論を焦点化し、それが近世以降いかに解釈されたかという問題提起を行うことにより、従来の神秘主義理解に支配的であった体験中心主義が見落としてきた、別様の理解の系譜を掬い上げることができた。ただし、この系譜が 18 世紀以降どのように続いていくことになったのかという問題は開かれたままである。

近世神秘主義の信仰論と現代宗教思想の接点を探るという第二の目的については、セルトーの神秘主義論および「信」論を中心に、いくつかの重要な成果を挙げることができた。しかし、バタイユやヴェイユも研究対象に含めた当初の計画に照らせば、得られた成果は限定的であると言わざるをえない。現代宗教思想としての神秘主義の可能性を歴史的に捉える補助線として信仰論の射程を示しえたことは本研究の大きな成果であるが、概して近現代（18～20 世紀）に

おける西欧神秘主義の思想史的展開については、今後さらなる研究が要請される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 渡辺優	４．巻 94 (1)
２．論文標題 暗夜の信仰の近世ーー一七世紀フランス神秘主義における十字架のヨハネ解釈の諸相	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 49-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20716/rsjars.94.1_49	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

１．著者名 渡辺優	４．巻 37
２．論文標題 魂の根底の溶解？ーー中世北方神秘思想と近世フランス神秘主義のあいだ（2）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京大学宗教学年報	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

１．著者名 渡辺優	４．巻 33
２．論文標題 神秘主義の知のありか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文化交流研究	６．最初と最後の頁 43-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

１．著者名 渡辺優	４．巻 70(1)
２．論文標題 「パロール」とそのゆくえ――ミシェル・ド・セルトーの宗教言語論の輪郭	５．発行年 2018年
３．雑誌名 天理大学学報	６．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

１．著者名 渡辺優	４．巻 36
２．論文標題 魂の根底の溶解？――中世北方神秘思想と近世フランス神秘主義のあいだ（1）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京大学宗教学年報	６．最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡辺優	４．巻 269
２．論文標題 体験なき信仰は空虚なのか？	５．発行年 2017年
３．雑誌名 あらきとうりよう	６．最初と最後の頁 76-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 渡辺優
２．発表標題 ミシェル・ド・セルトーそして／あるいはポスト世俗主義の宗教論――探究の今日的可能性
３．学会等名 科研「西洋における世俗の変容と「宗教的なもの」の再構成」A班研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 渡辺優
２．発表標題 キエティスム論争再訪
３．学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名
渡辺優

２．発表標題
神秘主義の知のありか

３．学会等名
東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター第54回文化交流茶話会

４．発表年
2019年

１．発表者名
渡辺優

２．発表標題
17世紀フランスにおける神秘主義的信仰論の諸相―—十字架のヨハネの「暗夜」の教説をめぐって

３．学会等名
フランス近世の〈知脈〉第4回研究会

４．発表年
2019年

１．発表者名
渡辺優

２．発表標題
ギュイヨン夫人と信仰の闇

３．学会等名
日本宗教学会第78回学術大会

４．発表年
2019年

１．発表者名
渡辺優

２．発表標題
キリスト教の破砕／燦めき―—現代カトリックの危機とミシェル・ド・セルトー

３．学会等名
日仏文化会館・日仏文化講座（危機の時代のスピリチュアリティ）（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2019年

１．発表者名
渡辺優

２．発表標題
「暗夜の信仰」の知の系譜学

３．学会等名
平成30年度土井道子記念京都哲学基金シンポジウム（招待講演）

４．発表年
2018年

１．発表者名
渡辺優

２．発表標題
17世紀フランス神秘主義における十字架のヨハネ

３．学会等名
日本宗教学会第77回学術大会

４．発表年
2018年

１．発表者名
渡辺優

２．発表標題
「魂の根底」の溶解？――中世から近世にかけての西欧神秘思想の変容をめぐって

３．学会等名
科学研究費補助金（基盤B）「宗教思想研究の基礎概念再考――mysticism及び関連概念の理論的・系譜学的研究」第5回研究会

４．発表年
2017年

１．発表者名
渡辺優

２．発表標題
中世から近世にかけての西欧における神秘思想の変容

３．学会等名
日本宗教学会第76回学術大会

４．発表年
2017年

〔図書〕　計3件

1．著者名	4．発行年
川口茂雄、越門勝彦、三宅岳史（編）、渡辺優	2020年
2．出版社	**5．総ページ数**
ミネルヴァ書房	vii + 408 + 23 (323-326)
3．書名	
現代フランス哲学入門（「セルトー」）	

1．著者名	4．発行年
ミシェル・ド・セルトー、山田登世子、今村仁司、渡辺優	2021年
2．出版社	**5．総ページ数**
ちくま学芸文庫	560 (516-547)
3．書名	
日常的実践のポイエティーク（文庫版解説「日常的実践という大海の浜辺を歩く者――ミシェル・ド・セルトーと「場」の思考」）	

1．著者名	4．発行年
山内志朗、渡辺優、アダム・タカハシ、新居洋子、大西克智、池田真治、小倉紀蔵、中島隆博、藍弘岳、松浦純、金子晴勇、安形麻理、伊藤博明	2020年
2．出版社	**5．総ページ数**
筑摩書房	307 + xxvii (45-74)
3．書名	
世界哲学史5――バロックの哲学（第2章「西洋近世の神秘主義」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap
https://researchmap.jp/yuwa

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関